

Graham St John ed.,  
*Victor Turner and Contemporary Cultural Performance*

Berghahn Books, 2008. ix + 358 pages, \$95.00/ £ 47.50.

田川 裕貴

本書は、人類学者ヴィクター・ターナー（1920-1983）の死後25年目となる2008年に、彼の思想を21世紀の現代に見られる文化的パフォーマンスへと広く適用し、「ターナーのモデルが今日もなお説得力を持ち続けている」（p.18）ことを示す試みとして出版された。文化的パフォーマンスとは、儀礼、祝祭などの宗教的領域と、芝居、音楽会、講演などの芸術的領域が分かれていない文化において、両者の要素を兼ね備える現象を観察するために、ミルトン・シンガーが提唱した概念である<sup>(1)</sup>。本書では、宗教的儀礼から、演劇、メディア、スポーツや旅行に至るまでを含む、幅広い人間活動の総称として用いられている。

編者のグレアム・セントジョンは、若者のサブカルチャー、エレクトロニック・ダンス・ミュージック・カルチャー、儀礼とパフォーマンスの人類学、新宗教の研究者である。編者を含む20人の寄稿者の多くは、オーストラリアまたはアメリカ、イギリスの大学に在籍しており、その専門分野は人類学から社会学、宗教学、観光学、メディア研究、パフォーマンス研究に至るまで多岐にわたる。

本書は、セントジョンによる序章と、以下の4部に分かれた17の章からなる。

Part I: Performing Culture: Ritual, Drama, and Media

Part II: Popular Culture and Rites of Passage

Part III: Contemporary Pilgrimage and Communitas

Part IV: Edith Turner

第1部から第3部にかけては、主にターナーの思想を、適宜修正を加えながら、現代の具体的な事例に適用した論文が集められており、表題の「現代の文化的パフォーマンス」に込めるものとなっている。最後に置かれた第4部「エディス・ターナー」は、ヴィクター・ターナーの妻として、各地のフィールド調査に同伴し、論文執筆に協力し、夫の死後は人類学の講師として活動しているエディス・ターナーの活動に注目し、ターナー夫妻の人類学の方法論について明らかにしている。以下、紙幅の都合上、第4部を割愛して各章の内容を紹介する。

第1章「文化的パフォーマンス理論の統合に向けて：再構成的ヴィクター・ターナー入門」で、J・ロウエル・ルイスは、ターナーの理論を概観し、その問題点の修正を試みる。ターナーは、社会生活が構造（日常生活）と反構造（儀礼の過程に現れる、境界性とコミニタス）を往還する弁証法的過程であると考えた。ルイスは、文化的パフォーマンスを社会規範の革新性と結

びつく「特別なイベント」と、継続性と結びつく「日常生活」の二項対立によって理解する点をターナーから引き継ぎながら、日常生活の革新的側面や、国家行事や国民の祝日のように継続性を強調する特別なイベントがあることから、ターナーの分析は不完全であるとして、次の点を指摘する。第1に、あらゆるイベントは、特別な側面と日常的な側面を併せ持つこと、第2に、日常生活と特別なイベントというカテゴリーは相互に依存して成立すること、第3に、日常生活には秩序的、特別なイベントには無秩序的な傾向があるが、どちらの領域にも秩序と無秩序が生じること、第4に、特別なイベントと日常生活の二項対立は、あらゆるイベントが持つ「遂行性」に由来することである。更に、文化的パフォーマンスを適切に説明するために、儀礼の概念に代えて、規範を強化すると同時に規範に対抗する、遊び<sup>プレイ</sup>の概念を提示する。

第2章「パフォーマンス（研究）の儀礼化」で、イアン・マクスウェルは、文化的パフォーマンスとコミュニタスの負の側面について論じる。コミュニタスとは、「差別のない、平等主義の、直接の、現存する、無理性の、実存的な、(フォイエールバッハ、ブーバーの意味で)我-汝の関係」<sup>(2)</sup>であるが、誇張されることによって「平等を目指すある種の宗教運動や政治運動の中に、急速に、専制や過度の官僚化などの構造的硬直化を招くかもしれない」<sup>(3)</sup>ことは、概してコミュニタスを望ましいものとして捉えるターナー自身も認める通りである。マクスウェルは、ジョン・マッケンジーのパフォーマンス研究に関する議論を参照しながら、ターナーとリチャード・シエクナーによるパフォーマンス理論が、ユートピア的コミュニタス観に基づいており、儀礼と、儀礼から派生し、善なる人間性解放の機能を持つ文化的パフォーマンスに注目するあまり、コミュニタスの暗く危険な側面を見落としているのではないかと指摘する。本章では、3つの具体的事例が挙げられる。初めに1933年のニュルンベルク決起集会に参加し、群衆に同調して「ハイル・ヒトラー」と叫んでしまった若いユダヤ人の体験が引かれ、結びに1983年のシドニー郊外のキリスト教福音派教会で開かれた集会と、1994年のパフォーマンス集団「シドニー・フロント」による観客参加型公演（キリストに石を投げる群衆の役を観客に宛てがう受難劇）における、マクスウェル自身の体験が語られる。これらは、詳細な分析を加えられてはいないものの、コミュニタスの暗黒面が厳然としてあることを示唆している。

第3章「『ソーリー・ビジネス』を執り行う：和解と矯正の行為」で、マイケル・コーエン、ポール・ドワイヤー、ローラ・ジンタースは、オーストラリア先住民と非先住民の対立と和解の問題を、社会生活における葛藤の現れを不一致、危機、矯正、再統合／分裂の4局面として捉えるターナーの社会劇理論に当てはめる。ヨーロッパのオーストラリアへの入植・侵略を社会劇の始まりとするなら、近年の和解への取り組みは、矯正の局面であると考えられる。ここで注目されるのが、前章では問題視されたパフォーマンスの機能、すなわち「潜在的な社会政治的有効性」である。オーストラリアでは、1990年代に和解を目指す風潮が高まったが、1996年に就任したジョン・ハワード首相は、先住民への正式な謝罪を拒否した。2000年に行われた一連の行動、すなわち25万人以上のオーストラリア人が参加した「和解のための民衆行進」、先住民による「奪われた世代」を主題とする現代演劇の上演、シドニー・オリンピック開会式に含まれた先住民のパフォーマンスは、遠回りながら、政府の対応に代わる有効な文化的パフォーマンスであると位置づけられる。

第4章「メディア研究の中のリミナリティ：日常生活からメディア・イベントへ」で、ミハ

イ・コマンは、テレビ、ラジオ、印刷メディアなどのマス・メディア研究におけるターナーの理論、特にリミナリティ概念の利用を顧みる。ターナーは、アルノルト・ファン・ヘネップに従って、通過儀礼が分離、境界、再統合の3部構造を持つと考えた。リミナリティとは、儀礼の主体が、以前の社会的地位から引き離されてから、新たな地位を得るまでの間に置かれる曖昧な状態のことである。コマンによれば、従来のメディア研究では、メディア・メッセージの消費、メディア・イベントの生産、社会の危機と歴史の変わり目におけるメディアの役割などを分析するために、リミナリティ概念が用いられてきた。ところが、こうした分析は、理論的・民族誌学的裏付けを欠いており、特にリミナリティの地域的、身体的、一時的な性質を見落としているため、単なるメタファーを超えて、メディアの消費や生産が、リミナルな儀礼を構築するとは言い難い。したがって、メディア研究は、文化的差異を超えた人間の普遍的特性を説明するための理論に基づいて進められなければならないとされる。但し、コマン自身がルーマニアの政治的不安定期においてメディアが果たした役割に見たように、メディア化された儀礼が「曖昧さ、動乱、無政府主義、そして[社会の安定に対する]脅威にすらなる」(p.105)という特性を持つ場合は、リミナリティ概念によって説明することが妥当である。

第5章「メディア化された世界の社会劇：人種差別的スティーブン・ローレンス殺害事件」で、サイモン・コトルは、1993年4月にイギリスで黒人の青年が人種差別的動機から殺害された事件と、その容疑者の不起訴に対するマス・メディアを中心とした社会の反応を、メディア化された社会劇として捉える。第3章と同様に、ここで問題とされるのは、パフォーマンスの社会に対する有効性である。ローレンス殺害事件に対する社会の関心の高まりは、新聞による「犯人」の名指し、ロンドン警視庁に対する公的取り調べとその「組織的人種差別」の告発へと繋がっていった。本章において特筆すべきは、コトルが、社会劇の4局面に、第5局面として退潮／再活性を加えていることである。これは、ローレンス事件が後から参照され、イギリス社会が人種差別を克服できたかを反省するための指標となっていることを指す。ここまでの、第1部「パフォーマンス・カルチャー：儀礼、演劇、そしてメディア」である。

続く第2部と第3部は、現代社会の様々な文化的パフォーマンスを「通過儀礼」や「巡礼」<sup>(4)</sup>として捉え、ターナーのリミナリティやコミュニタスの概念によって説明する。

第6章「近代的スポーツ：リミナルな儀礼か、リミノイドな娯楽か？」で、シャロン・ローは、リミナリティの、遊ルーディックびの側面に注目し、それをスポーツと結びつける。ここでの遊びとは、社会文化的な体験を構成している要素を、日常的な規範に縛られることなく、自由に切り離したり、繋げたりすることを指す。近代スポーツの性質を明らかにする上で問題となるのが、伝統社会のリミナルな儀礼に対して、複雑化した近代社会の世俗的、娯乐的な現象を表すリミノイド（「リミナルに似た」を意味する）の概念である。ターナーは、近代的スポーツをリミノイドに分類したが、ローによれば、この区分は正しくない。スポーツには確かに娯乐的な側面もあるが、個人ではなく集団から生まれ、我々が何者かという象徴的なイメージを共有させ、労働と遊戯の要素を兼ね備える点で、リミナルであると言えるからである。

第7章「トランス・トライブとダンス・ヴァイブ：ヴィクター・ターナーとエレクトロニック・ダンス・ミュージック・カルチャー」で、グレアム・セントジョンは、トランス音楽を流すダンス・パーティー（レイヴ）に注目する。これは、対抗文化の流れを汲む文化的パフォーマンス

ンスであり、参加者はダンスフロアで「ヴァイブ」と呼ばれる他者との心身の一体感を体験する。セントジョンは、この体験をターナーの「自然発生的コミュニタス」と関連づける。

第8章「現代の通過儀礼としてのバックパッキング：ヴィクター・ターナーと若者による旅行の実践」で、エイミー・マシューズは、海外から帰ってきたばかりの20代のオーストラリア人バックパッカー7名から体験談を聞き取り、バックパッキングを現代の若者の「世俗の通過儀礼」として捉える。現代の社会生活に対して幻滅感、退屈さ、不確かさを感じている若者たちにとって、海外とは、リミノイドの領域であり、そこでは危険を伴う行動を敢えて選択することによって、自由と真正性のある体験を比較的短期間の内に得ることができる。特に、旅行者間に形成されるコミュニタスの体験は、日常生活への回帰を前提とするために、一層強くなり、世慣れた、国際的な自己感覚の形成を促すのである。

第9章「ヴィクター・ターナーとヒルエンドまで歩く：演劇制作の浸<sup>イマージョン</sup> 礼的行事」は、チャールズスタート大学コミュニケーション（演劇／メディア）コース専攻の学部生全体を対象として、ジェラルド・ボランドが自ら企画し、1989年から続く「ヒルエンド・プロジェクト」の記録である。そもそもこのプロジェクトは、新入生を上級生と交流させ、彼らが、卒業後に職業俳優となって与えられた脚本を演じるばかりではなく、学習したパフォーマンスの原則をどこにでも革新的に応用できるのだということを理解させることを主な目的としていたが、ターナーの理論を用いることによって、新入生の体験は、パフォーマンスに対する新たな見方を得て、コースの仲間の一人へと変わる通過儀礼として捉え直すことができるようになる。第2部「大衆文化と通過儀礼」はここで終わる。

第10章「試練とオペラについて：バーニングマン・フェスティバルにおける反省的儀礼化」で、リー・ギルモアは11年間参与観察を続けてきた「バーニングマン」を通して、ターナーの思想と現代の儀礼の関係について論じる。バーニングマンとは、アメリカ、ネヴァダ州の砂漠に仮設の都市を形成して催されるアングラのパフォーマンスの祭典である。1980年代後半にバーニングマンが初めて企画された時、ターナーの思想は直接参照されなかったにもかかわらず、参加者が苛酷な自然環境の中で1週間にもわたって野営する試練としての側面は、ターナーの挙げる巡礼の条件を部分的に満たすものとなった。そればかりでなく、1999年の開催時に、ターナーの通過儀礼論を脚本に反映する歌劇が上演されていることから、儀礼から生じた理論が、大衆文化に浸透し、新たな儀礼の形成に影響を与えていることがわかる。

第11章「自己のためのショッピング：巡礼、アイデンティティ形成、買い物セラピー」で、キャロル・M・キューサックとジャスティン・ディガンズは、宗教の商業化を背景として、買い物客を巡礼者に、ショッピング・モールを聖地に準える。キューサックとディガンズによれば、まず、19世紀半ば以降の西洋社会において、世俗化が進行し、個人主義が普及した結果、家族や地域社会に対する忠誠ではなく、個人的な嗜好と傾向によって商品を選択するかどうかが決まる市場という領域が生まれ、宗教は消費の対象となった。また、「宗教」というカテゴリーが曖昧になったことで、伝統的な宗教の領域にない消費行動が、超越的体験の媒体となった。こうした流れを前提として、シドニーのクィーン・ヴィクトリア・ビルディング（以下QVB）における買い物が、事例として紹介される。QVBは、19世紀末の壮麗な建築物であり、現在はショッピング・センターとして200以上の店舗を抱えている。その最上階のロマンティックな雰囲気を持つレ

ストランで行われた2004年7月の「フォーマル・ファッション・スペクタキュラー」は、高校卒業を控えた少女たちの通過儀礼であったと言える。彼らは、完璧な自己に変身できる可能性を夢見て、階下の「消費の聖堂」でドレスや宝飾品を買い求め（他方、準備に協力する親は自らの過去を我が子に投影し）、盛装して卒業記念のパーティーに臨む。こうした消費行動に潜む、自己の発見と実現、そして変革という目的は、ターナーの分析した巡礼に共通する。

第12章「ターナー、ガンディーに会う：巡礼、儀礼、非暴力直接行動の普及」で、ショーン・スカルマーは、社会運動のテクニックが「<sup>トランスレーション</sup>翻 訳」と「<sup>リインヴェンション</sup>再 構築」を通して国際的に普及する過程、具体的には、マハトマ・ガンディーのサティヤーグラハ（非暴力直接行動）が、1950年代後半のイギリスにおける反核運動に適用される過程を、ターナーの巡礼論によって説明する。ここで、巡礼の条件として注目されるのは、第1に、自発的な行為であり、意識的に選択されること、第2に、リミノイドないし準リミナルな状態にあること、第3に、コミュニタスの体験を伴うこと、第4に、旅程が巡礼者を変化させることである。サティヤーグラハの場合、インドに赴いて直接ガンディーに学んだイギリス人が、1930年代から1950年代にかけてガンディーの思想を翻訳し、周囲の白眼視に耐えながら、イギリスに適した形式を模索して、実践を繰り返した。彼らは団結して、イギリスでもサティヤーグラハが通用するはずだという自信と、行動する勇気を育み、その試みは、1950年代後半におけるアルダーマストーン行進の成功として結実した。これは、前後の各章と比べて、時代がやや遡るが、1960年代の政治活動の先触れとして位置づけられている。

第13章「ドラマ、フィールド、そして『適切な教育』：特別支援を必要とする児童保護者のための、儀礼の過程、論争、コミュニタス」で、マージ・ノーワクは、10年半にわたる参与観察に基づき、行動障害を持つ児童の保護者による公教育をめぐる活動を分析する。アメリカでは、障害者が21歳になるまで、あるいは高校を卒業するまでの「無料の適切な公教育」が法律によって保障されているが、実際の教育現場では、適切な教育を受けることが困難である。ノーワクは、特に誤解を受けやすい行動障害を持つ我が子のために、保護者が同じような境遇にある人々の体験談に支えられながら地域の学校と交渉する過程を社会劇として捉える。更に、そうした保護者同士が弱みを分かち合うオンライン・コミュニティにコミュニタスを見出す。ここまでの、第3部「現代の巡礼とコミュニタス」である。

以上が本書第3部までの概要である。ヴィクター・ターナーは、アフリカの部族社会の儀礼についての人類学的分析を研究の出発点としておりながら、その理論の広範な適用可能性ゆえに、様々な研究分野で参照されている。しかしながら、セントジョンが本書の序章で米文学者ドナルド・ウェーバーを引いて示すように、1970年代に大いにもはやされたターナーの思想は、1990年代には説得力を弱めてしまったように見える。その原因となった諸批判を踏まえ、改めてターナーの思想の可能性と限界を探ることが、本書の寄稿者たちに共通する問題意識であると言えよう。

寄稿者の一人であるギルモアは、「ターナーの理論は、通過儀礼や巡礼にはリミナリティやコミュニタスのような性質が普遍的にあるとする傾向のために、そしてこうした枠組が[…]適用できない場合について十分に注意を払っていないために批判されうる。」(p.223-4)と端的に問題点を述べているが、確かに、ターナーの理論は決してあらゆる儀礼（より拡張的には文

的パフォーマンス)を説明できるものではないようだ。なぜならターナーは、儀礼をリミナリティやコミュニタスを通して、社会を(その維持、改革のどちらに向かうにせよ)あるべき姿に「矯正」する働きを持つものとして捉えたからである。ターナーが抱いた「あるべき姿」がどのようなものであったかは、コミュニタスが、本書の序章(p.7)でも触れられているように、西洋の文学<sup>(5)</sup>作品に描かれた人間関係<sup>(6)</sup>、第2次世界大戦中の王立工兵隊にあっての仲間意識、1960年代アメリカにおける対抗文化が掲げた理想、1950年代後半に改宗したローマ・カトリックの信仰、妻エディス・ターナーとの絆などの影響を受けて形成されたことから窺い知ることができ、彼自身の文化的背景を反映していることは疑いないようだ。

この反構造への傾注のために、社会の葛藤を解決する機能を持たない場合や構造によって支えられる場合<sup>(7)</sup>のパフォーマンスは、ターナーの議論の対象とならない。しかしながら、本書では、こうした指摘を深く掘り下げておらず、とりわけ事例研究では、基本的にターナーの方針に則って、いかにパフォーマンスがその目的を達成しているかを分析することに大きな関心が寄せられている<sup>(8)</sup>。

とは言え、パフォーマンスの機能に集中することによって、興味深い傾向が明らかになっている。オーストラリア先住民と非先住民の和解の推進(第3章)、イギリス社会の人種差別撤廃(第5章)、核保有の反対(第12章)などが、社会全体に関わる目的であるのに対して、レイヴ(第7章)、バックパッキング(第8章)、バーニングマン(第10章)、買い物と卒業記念パーティー(第11章)などは、個人がかくありたいという自己に関する理想を実現するために、任意に選ぶ手段である<sup>(9)</sup>。ターナーの理論は、かつて部外者からは意味のない迷信とも思われがちであった部族社会の儀礼の重要性を明らかにした。同様に、個々人の自由意志に任せられた現代のパフォーマンスについても、それらが当事者にとってはどれほど意義深いものであるのかを教えてくれる。したがって、現代の宗教の、「人生を、自己発見と自己実現の巡礼でありながら、気晴らしと楽しみに満ちた、観光旅行のようなものとして見なす」(p.227-8)側面に目を向けるにあたっては、ターナーに有益性を見出す本書の視点が一見に値するのではないかと思われるのである。

## 註

- (1) Singer, M. 1955. "The Cultural Pattern of Indian Civilization." *Far Eastern Quarterly* 15, no. 1: 23-36.
- (2) Turner, V. W. 1974. *Dramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*. Ithaca: Cornell University Press, p. 274.
- (3) Turner, V. W. 1969. *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. Chicago: Aldine, p. 129.
- (4) キリスト教巡礼論は、妻エディスとの共著になる*Image and Pilgrimage in Christian Culture: Anthropological Perspectives* (1978)で取り上げられた。
- (5) ターナーが文学に造詣深く、シカゴ大学では人類学の他にダンテやウィリアム・ブレイクについての講義を持つほどであったことは、本書第14章でエディス・ターナーが詳しく語っている。
- (6) ジェフリー・アレクサンダーが挙げるような、社会の複雑化に伴い、儀礼らしさを取り除

- かれたパフォーマンスがこれに相当する。しかしながら、ロナルド・グライムスが述べるように、情報通信技術が発達した現代社会は、むしろ反構造的な儀礼の特徴を促進すると考えることもできる (p. 12-3)。
- (7) ルイスの述べる「国家行事や国民の祝日のように継続性を強調する特別なイベント」を指す (p.43, 第1章)。セントジョンによれば、ターナーは、規範的コミュニタス、イデオロギイ的コミュニタスの概念によってこれを説明している (p. 17)。
- (8) セントジョンは、ターナーの信仰に由来すると考えられる思想に対する懐疑的な態度を指して、「合理主義支持の西洋的偏見を反映する、人類学（およびカルチュラル・スタディーズなど）に特徴的な無神論」の現れであるとしている (p.13)。本書第4部で取り上げられるエディス・ターナーの方法論は、この「無神論」に対するアンチテーゼであると言える。尤も、ターナーが「<sup>マージナル</sup>周縁的な西洋文化の領域内にある幻視的、神秘的、「オルフェウス教的体験」を信じる」 (p.14) ことは、彼の文化的、思想的な背景に関して、自他による詳しい記述があるからこそ許容されていると見るべきであろう。
- (9) 本書第7, 10章の事例が、対抗文化から派生しているにもかかわらず、ヴェトナム反戦運動や公民権運動との結びつきを失っていることに注意しなければならない。なお、ヒルエンド・プロジェクト (第9章) と適切な公教育の要求 (第13章) については、教育に関わるので公私に跨がる目的を持つと言えよう。